



令和8年2月24日

里山広葉樹利活用推進シンポジウム

「森の彩を暮らしへ」

里山広葉樹の利活用と再生

里山広葉樹利活用推進チーム（国有林野部長）

長崎屋 圭太

里山広葉樹林の現状

放置された里山林の面積（推計）

400万ha（参考：人工林面積 1,000万ha）

- 昭和30年代以降、燃料や肥料・食料採取の場としての役割が低下し、**管理が停滞、実質的に放置**されている
- 放置による樹勢の衰弱や藪化が、里山特有の生態系のバランスを損ない、**生物多様性の危機**が生じている

広葉樹が持つ可能性と現状の乖離

広葉樹が持つ可能性 その1

多彩な用途展開

針葉樹に比べ、家具、内装材、
工芸品など、**幅広く、身近な**
用途を持つ

広葉樹が持つ可能性 その2

巨大な市場

森林・林業・木材産業界に
とって無視できない市場規模

国産広葉樹の利用状況

輸入広葉樹や国産針葉樹に比べ
量的にも質的にも不十分

市場の変化と 国産広葉樹への期待



自然志向とプレミアム消費

本物志向の高まりにより、国産材の風合いを活かした製品への期待が拡大



輸入環境の悪化

海外の資源制約や輸送費高騰により、輸入量は減少、価格は急騰



サステナブルな動き

国産広葉樹の利活用や植林・再生に取り組む企業・団体が日本各地で増加

なぜ国産広葉樹は「使われない」のか



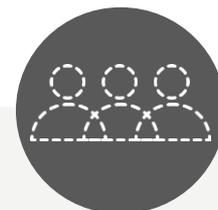
情報の断絶

川上と川下の情報が互いに伝わっていない



少量・多樹種

少量・多樹種という特性から、大量生産に向かない



担い手不足

技術の継承が難しく、担い手が少ない

有識者会議の開催と提言

(令和6年度 里山広葉樹利活用推進会議)

里山広葉樹林の再生が生み出す新たな価値

生物多様性の回復

生物多様性の危機の一つである「アンダーユースによる危機」を脱し、生物多様性の回復に貢献

地球環境の保全

輸入広葉樹を国産広葉樹に置き換えることで、輸送距離の短縮によるCO₂排出量の削減に貢献

地方創生

多様な使い道のある広葉樹は、それぞれの地域の産業と結びつき、木工所の再生など地域の活性化に寄与する

産業の持続性の向上

輸入材依存を脱却するとともに、SDGsや消費者ニーズにも応え、国内林業・木材産業の経営の持続性向上につながる

里山広葉樹利活用・再生 プラットフォームの設立

詳細は後ほどのセッションにて
里山広葉樹利活用推進チームから発表



シンポジウム講演者の御紹介

国産広葉樹の現在地

～流通のボトルネックと、未開拓市場のポテンシャル～



株式会社森未来 プロダクトマネージャー
井口 光 氏

豪雪地集落維持のために、 ブナ林を育成しながら活用する



スノービーチ・プロジェクト 世話人
紙谷 智彦 氏

広葉樹材流通の課題と ノースジャパンの取組



ノースジャパン素材流通協同組合 理事長
鈴木 信哉 氏

既に里山2万ha以上を活用している 薪炭業を更に発展させるには



東京燃料林産株式会社 社長
廣瀬 直之 氏

旭川家具の挑戦

～森と広葉樹、そしてデザインで築くブランド戦略～



旭川家具工業協同組合 理事長
藤田 哲也 氏